



発行日 2004年5月31日

発行人 藤川享胤 編集責任者 浅井宣亮 編集委員 大谷 館盛 太田 菅原

発行所 SOTO禅インターナショナル事務局 〒164-0002 東京都中野区上高田1-27-6

Tel. 03-3361-0614 Fax. 03-3361-0634 URL: <http://www.soto-zen.net/>

郵便振替 00100-6-611195 SOTO禅インターナショナル

Vol.25



CONTENTS

●巻頭「国際布教に思うこと」	曹洞宗教化部長 宮川敬學	1
●特集／S Z I 総会レポート	S Z I 事務局員 太田賢孝	2
中川正壽師・ベナージュ大円師ご挨拶		2
討論1：国際布教支援積立金の活用について		3
討論2：国際平和について宗教者としてのあるべき姿		5
●桑港寺70周年・好人庵10周年・南アメリカ開教100周年	文責・S Z I 会報編集長 浅井宣亮	6
●アメリカの仏教書 前角博雄老師の本(2)	ヴァレー禅堂堂頭 藤田一照	8
●海外レポート 大遠忌の思い出	禅宗寺元理事長 井上慎二	10
●S Z I 動静報告・会費納入者・寄付者リスト		11
●両大本山ワークショップ案内		12

巻頭

「国際布教に思うこと」

曹洞宗教化部長 宮川 敬 學



日夜宗門の国際布教に多大のご努力を頂いておりますSOTO禅インターナショナルの皆様にご心からの敬意と連帯のご挨拶をお送り致します。

私は現在の部署に配属を頂いてから、国際布教が我が身のこととして感じられるようになりました。ことほど左様に、現在の宗門において国際布教に対する関心はそう高くはないのではないかと思います。

それはなにを言っても言語の厚い壁を意識するからであります。

わが宗門は中国をその源流としており、これが日本化したものです。しかしこれは同じ漢字文化圏の中でのことであります。一方、現在の国際布教は主としてアルファベット言語圏にて展開されています。表意文字と表音文字、この両者の持つ相違点はかなりの深刻さを有しているといえるでしょう。

私は昨年北アメリカとハワイのご寺院を訪問した折に、ある国際布教師さんから次のように告白されました。「梅花の三宝御和讃一番の『心の闇』について解説したところ、『私の心が闇なのか』と聞かれて絶句した。幼い頃から一貫したキリスト教の教育を受けて成長した彼らに、仏教を教えるのはかなり難しい」と。これには返

答に窮してしまいました。

また、北アメリカにおいて授戒会の研修会をおこなった際、声明についての説明をしました。例えば丸節などを実演したところ、初めてのことで「丸のように聞こえない」などの質問を頂きました。現地の皆さんは、リズムを通して法に触れる機会として興味を持たれたようです。どのような機会に声明を使えばよいのかなど、次から次に問われるわけです。中には戒会中の御詠歌を聞いて涙あふれる思いがした、と感想を述べた人もおられました。

私たちが感ずる「ありがたさ」という宗教的な情緒、感性およびその体験を、言語・風土・文化の相違を乗り越えて、その思いの共有を広めるにはいかがすればよいのか。

「なにさまの、おわしますかは知らねども、かたちけなさに涙こぼるる」を実体験するには、行法・行持の敷衍と徹底が大事なのかと思い、加えてはそれを異文化体系のなかで如何に構築してゆくのか。緊急焦眉の課題ではありますが、なかなか困難さを伴っていると感じました。

皆様の日頃のご苦勞を謝し、私が海外において経験したこと的一端を申し上げ、ご挨拶と致します。

特 集

S Z I 総会レポート

S Z I 事務局員 太田 賢 孝

総会報告・当日資料は、SZI事務局より会員の皆様向けに、会報本号の発行に先立って発送させて頂きました。そちらの資料も併せてご確認ください。

■ 2004年度総会・意見交換会に至る経緯

平成16年3月3日午後2時より、曹洞宗檀信徒会館4階芙蓉の間にて、2004年度SZI総会が開催されました。

今回の総会を企画するに当たり、SZI執行部は創立10周年に因み過去の総会を振り返りました。例年、旧年度の事業・会計報告、新年度の事業・会計報告、年度により役員改選等という総会議事の他、各界の先生を招いての講演会やシンポジウム等を開催しておりました。

そこで、私たちが抱いたのは、執行部が様々な提案をし、幾つかの質疑を経て会員が承認をするという「主・客」に分かれた総会で良いのかという問題意識でありました。一方通行の情報発信ではなく、国際布教に心を向けている執行部と会員の双方向の意見や提案によって、SZIの活動を形作っていく事は出来ないものかと考えました。

そこで今回の総会では、従来の講演会・シンポジウムに代えて、「意見交換会」を開催することになりました。

■ 総会・意見交換会の次第

①開教師示寂者追悼法会

②総会・開会の辞

- ・会長挨拶 SZI 会長 藤川享胤
- ・来賓挨拶 曹洞宗教化部長 宮川敬學師
- ・ゲスト挨拶 ドイツ普門寺 中川正壽師
- ・ゲスト挨拶 北米平等山禅堂 ベナージュ大円師
- ・議長選出
- ・議事進行 2003年度事業・会計・監査報告
2004年度事業計画・予算審議
- ・閉会の辞



中川正壽師

③意見交換会（進行 SZI 副会長 福島伸悦）

- ・SZI 10周年のあゆみ
- ・国際布教支援積立金の活用について
- ・国際平和について宗教者としてのあるべき姿

④懇親会

■ 中川正壽師ご挨拶（現状報告）

私は1996年からミュンヘンとザルツブルグの間に位置する"大悲山普門寺アイゼンブッフ禅センター"に住んでいます。この禅センターには建物が2つあります。

1つ目の本館は禅道場として、長期にわたり体系的に仏教のテーマを掘り下げるスタディーコースと接心に使っています。スタディーコースは始めて2年ほどですが、漸く軌道に乗ってきました。

2つ目の別館は、禅や仏教のオリエンテーションに使っていますが、時にはフォークダンスやコンサートなどの文化行事も行っています。それから別館は元々ホスピスを考えていましたが、あちらはキリスト教の組織や人材などが整っていて、ホスピスを独立して行っていくのは困難でした。そこで20年来の知人と、ガンの初期患者を対象にした「健康コース」をこの5月から始める事にしました。今年は2回、来年は4回開催します。私は坐禅、メディテーションと個人面談をします。もう一人が食事や生活についての健康講座をします。

ユニークな禅センターとして出発したいと思っていましたが、現在の地に住んで8年。ようやく方向性が定まり、気持ちの上ではこれからです。今後は、本館の屋根裏に手作りの禅堂を作ります。カルチャーセンターが充実しても、禅道場を固めないで浮いてしまいますので、屋根裏の禅堂で根っこ作りをしたいと思います。

現在のヨーロッパには、弟子丸老師の門弟を中心としたグループが多くあります。しかしあちらではチベット仏教が主流です。先生やスタッフが充実している上に、現地の指導者が現れてから2～30年が経っています。比べて禅はまだ歴史が浅く、禅が根付くのはこれからです。

2006年には普門寺開創10年を迎えます。よりよい節目を迎えるため、今後も内外の充実に励んで参ります。

■ ベナージュ大円師ご挨拶（現状報告）

北米で平等山禅堂を主催していますベナージュ大円と申します。4年前、SZIをはじめとする皆様のご協力により、禅道場を始めることが出来ました。本当にありがとうございます。

また今日出席の方の中にも、お世話になっている方がたくさんおられて、十分なお返しもお出来ずにはおりましたが、今日はお会いできて大変うれしく思います。



ベナージュ大円師

現在は2人の出家得度を受けた弟子がおり、来年の5月22日には晋山式と首座法戦式を修行させて頂きます。

現在の北米には、アメリカで修行したアメリカ人の曹洞宗僧侶が数多くなってきました。10年ほど前から、話し合いの場が持てないかと考えておりましたが、今年の10月に、アメリカで修行した若い宗侶たちの会議が開かれるようです。アメリカで修行した人の数は増えてきていますが、日本で修行をした者はまだまだ少数です。私も含めて何人かは「日本とのご縁を大事にしよう」と引き続き発言するつもりで居ます。

ところで、去年私はロサンゼルス禅宗寺で開催された授戒会に随喜させていただきました。その時は言葉で言えないほど感動しました。本当に平等な和洋折衷、そこでの日本語にはすべて通訳が付けられており、半分は日本語、半分は英語という環境で、英語を話す者の誰もが疎外感を持たない、素晴らしいものでした。

ですから、来年の自分の所の晋山式ではどうでしょうか、思案しております。英語を使おうか、日本語を使おうか、両方使おうかと、まだ決まっておりませんが、SZIの皆様は、曹洞宗の中でも一番国際的な指導者の方々でありますので、是非とも、これからも引き続きご指導を頂きたい、今後ともよろしくお願いします。

■ 意見交換会

討論 1

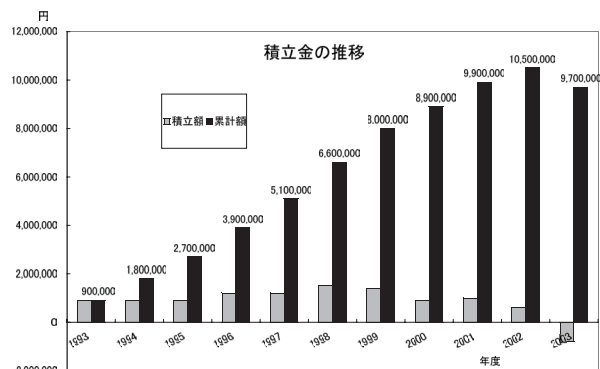
国際布教支援積立金の活用について

①執行部案（発表 SZI会計 亀野哲也）

この積立金は、「海外開教師の支援」として始められました。毎年100～150万円程が積み立てられ続けて10年、2002年に積立金残高は1000万円を超えました。表をご参照下さい。（2003年度の支出は、SZI10周年・ハワイ開教100周年のためのものです。）

積立金については常に協議が続けられていましたが、使途を「海外開教師の支援」に限定せず、「国際布教に関わる内容」に対して、或いは人材育成という面から「育英会的な内容」に対しても支弁出来ないかと議論が広がっていきました。

このような議論の中で、積立金を有効に支弁していく為には明確な「規程」を作成し、確固たる運営をする必要があるという点に至りました。



そこで、一つの叩き台として、「運用規程(案)」を作りました。（紙面の都合上、主要点について内容を要約し掲載しています。編集部）

名 称…SOTO禅インターナショナル（以下、SZI）
国際布教支援金（以下、支援金）

目 的…国際布教活動への幅広い支援を行う。特に必要と認められる国際布教教化プロジェクト、人材育成のために拠出する。

支援対象…曹洞宗国際布教師・曹洞宗国際布教寺院・曹洞宗の国際布教を志し研鑽する者。

選考委員会…支援金選考委員会（以下、選考委員会）を設置する。選考委員は若干名で、SZI役員会において選出し、会長が任命する。任期は2年。

支援金の限度額…会計年度内に100万円を限度とする

申請時期…申請は随時。申請後、一ヶ月以内に可否を発表する。支援金が年度内限度額に達している場合は、当該年度は申請を受け付けない。

手 続 き…支援金を希望する時は、申請書類を選考委員会に提出する。推薦人は曹洞宗宗侶でなければならない。曹洞宗国際布教寺院への交付については、寺院代表役員による依頼書でよい。

義 務…支援金の交付を受けた者は、報告書を提出する。

以上、執行部案を提示致しました。この案を叩き台として、この一年間、支援金について会員皆様のご意見、ご提案を頂戴しながら議論を重ね、来年度には実行出来たらと思います。

②意見交換・議論内容（◎…参加者 執…執行部）

(1)支援金の収支について

◎「積立金運用規程(案)」はいわば「出口」について述べたものだが、今後、「入口」はどうなっていくのか。現在1000万円あっても、毎年100万円使っていけば、10年で無くなってしまふ。見通しをどうお考えか。

執SZIの活動の中で、この10年間で毎年100～150万円を積み立ててきたが、支援金活動を開始しても、これまでのように努力は続け、支援金残高は1000万円に戻していこうと考えている。

(2)支援のタイミングについて

- ㊦「年度予算100万円」「申請から一ヶ月以内に可否決定」とあるが、支弁の可否について金額や基準について不公平が生じ、早い者勝ちの傾向が生じるのではないか。
- ㊧選考時期を一律にすることで、公正性を確保する事が出来るのではないか。
- ㊨支援時期についてはトレードオフ関係がある。
一律選考→公平性は保てるが、機動性が失われる。
申請毎選考→公平性は失われるが、機動性がある。
- ㊩緊急性のある案件についての対応は、支援金以外にも可能である。これまでもSZIから支弁の実績があり、そちらで対応しても良いかと思われる。

(3)対象について

- ㊦「選考委員会で可否を決定する」とあるが、SZIの活動が支援金の交付に終始してしまう恐れはないか。
- ㊧現実に活動している人や組織に対する援助だけでなく、多少不確実要素があっても、ビジョン・将来性のある活動に対しても支援して欲しい。
- ㊨「国際布教」というのは、日本から海外に向けての「国際」か、海外から日本に向けての「国際」か。
- ㊩「国際」にはどちらも含めて考えています。例えば、国際布教師の師弟が日本で研鑽・安居などを修める時の旅費等についても検討範囲となるでしょう。
- ㊦学術関係の活動についての支援はあり得るのか。
- ㊧学術関係の支援は、SZIの設立目的から外れるのではないか。実際の国際布教と線を引いた方がよい。
- ㊨現に国際布教をしている、国際布教したいという人や寺院に対して支援するだけで良いのか。現在、国際布教について問題意識の無い人や、SZIの会員に対する啓発活動として国際布教の現場に触れてもらう事なども大切ではないか。

(4)保険金への支弁について

- ㊦SZIは身のこなしの軽やかな任意団体だけに、宗務庁では出来ない援助をしてはどうか。例えば、国際布教に携わっている人が不慮の事故や怪我など輻輳の急という時でも、宗務庁では緊急的な金銭の支弁が出来ない。SZIなら緊急的な支援金にも対応できるのではないか。更に「緊急時の支援・保障」という点からすれば、恒常的に各種保険に加入していれば、国際布教師の精神的・金銭的な生活保障・安心に繋がると思う。



(5)年度内の予算・資金規模について

- ㊦1000万円の基金の規模に対して年度内100万円というのは、やや過大ではないか。まだ支援の実績・経験が無いうちは、予算を抑えた方がよいし、基礎となる資金規模も上がり、信用度が増すのではないか。
- ㊧上限が100万円という事で提案させて頂きましたが、状況を見ながら支弁していきたいと思います。
- ㊨積立金残高1000万程度なら、更に規模の増大を目指しても良いのではないか。4000万円あれば、基金として運用することによって、年間100万円程度の支援金は賄う事が出来るだろう。資金運用(投資)によって利殖を得てはどうか。
- ㊩積立金開始当初の目標が1000万円でありました。その1000万円に達したので、約束通り支援事業の立ち上げを目指していますが、10年を経て積立目標アップの合意がなされれば、それでも構いません。また利殖については、SZIは法人格を持っていないので、投資活動をしてきませんでした。ちなみにこれまでの積立金は個人名義で貯金している状況です。

③総会・意見交換会を経ての運用細目(案)

上記のような議論を経て、現時点では次のような「運用細目(案)」・検討内容に至っております。

SOTO禅インターナショナル

第1条 (名称) この積立金の名称を、SOTO禅インターナショナル国際布教支援金(以下、国際布教支援金)と呼ぶ。

第2条 (目的) この細目は、国際布教の活動への幅広い支援を具体的に行うものである。特に必要と認められる国際布教教化プロジェクト、並びに人材育成のために拠出を行うことを目的とする。

⇒曹洞宗に限定するかどうかは要検討

第3条 (支援対象) 国際布教支援金の対象を、曹洞宗国際布教寺院、及び曹洞宗の国際布教を志す者とする。

⇒補助事業か、勉学・渡航費等も含めるか要検討

第4条 (選考委員会) この規定の運用に当たる国際布教支援金の拠出に関する選考にあたっては、SOTO禅インターナショナル国際布教支援金選考委員会(以下、選考準備委員会)において行う。

(委員) 委員長 1名 委員 若干名

(事務局) 幹事 1名

2) 事務局は、SOTO禅インターナショナル事務局内に置く。

3) 委員長は、委員の互選とし、委員会を統括する。

4) 委員は、SOTO禅インターナショナル役員会において選任し、会長が任命する。

5) 幹事は、SOTO禅インターナショナル事務局長をもって充て、選考及び国際布教支援金の拠出に関する事務を掌理する。

6) 委員の任期は2年とし、再任は妨げない。

第5条 (支援金の限度額) 国際布教支援金は、総額で年度毎に100万円を超えることができない。

⇒交付金額については要検討

第6条 (支援金の申請時期) 国際布教支援金の拠出を受けようとするものは、委員長に申請しなければならない。

2) 申請は、所定の申請用紙をもって申請する。

討論 2 国際平和について宗教者としてのあるべき姿

①意見発表（群馬県長楽寺 峯岸正典師）

イラク問題をきっかけとして平和に取り組む宗教者の態度について考えた時、「平和は作るものであり、語るものではない」と思います。仏典から耳によい言葉を取り出してきて、メッセージを伝える事も結構ですが、そのメッセージを裏打ちする宗教者の信念・行動がなければ、「言葉に逃げた卑怯な態度」でしかありません。

今回、平和を望む宗教者の態度を2つほど挙げます。

1、宗教が内在する抗争力、反平和性について

宗教は危険性も併せ持つ。「信仰」と「盲信」に対する明確な理解を確立しないとならないであろう。

2、異宗教との関係について

異宗教・異価値を宗教者はどう捉えるか。「異文化理解」といわれるが、それは、異なる者に対する理解の幅、柔軟性、自らの枠の広さを言うのではないか。その為には「対話」が必要である。勿論、自説の押しつけではなく、柔軟に相手の話を聞く態度である。

②参加者意見発表

峯岸師の発表を受けて、参加者の挙手による意見発



峯岸正典師

表が行われました。その一部を要約して掲載します。

- ・「人権・平和・環境」を謳いながら、プリントを配布して終わりではいけない。いずれも「行動」によって示すものである。それが宗教者としての語り方である。
- ・住む寺があり、檀務がある状況では、例えば平和を求めて戦地で行動する事は難しい。自分が活躍する場所で、宗教の受け止め方、異文化・異価値を尊重する態度を啓蒙していく事も宗教者の態度ではないか。
- ・日本の仏教界は長らく檀家制度に組み込まれていた。多くの僧侶が、異文化・逆境と接した経験に乏しいと言えよう。異文化と戦い、異教徒と宗教論争を経てきたイスラーム世界とは、その点で大きく異なり、日本は経験不足である。これからは積極的に外との交流を持って、経験を積む必要があるのではないか。
- ・宗教間の対話・共感・相互理解は必要であるが、「それでも自らはこの宗教で信仰が決定している」という意志のある「緊張関係」は忘れてはいけないと思う。

そして最後、進行役福島副会長によって意見の総括がなされ、先ずは私たち一人一人の宗教者が、自らの教義・信仰の自覚に基づいた実践を重ねていこう。異文化交流という態度を取っていこうという事でまとめられ、議論は懇親会場へと引き継がれました。

■ ご意見募集

以上「2004年度総会・意見交換会」の報告としますが、「意見交換」に終わりはありません。何時でも、何時までも、皆様のご意見・ご助言をSZI事務局までお寄せ下さい。特に支援金については、来年度の実施を目指しております。率直なご意見を宜しくお願い致します。

〒164-0002 東京都中野区上高田1-27-6

Tel. 03-3361-0614 Fax. 03-3361-0634

URL: <http://www.soto-zen.net/>

国際布教支援金運用細目(案)

3) 委員長は、申請を受けたときは、速やかに選考委員会を開催しなければならない。

4) 申請の受理に当たっては、すでに前条に定める限度額を満たしている場合は、これをしない。

⇒交付申請時期については要検討

第7条（手続き）国際布教支援金の交付申請は、所定の申請用紙に記入の上、選考委員会に提出しなければならない。なお、推薦人は曹洞宗寺院の代表役員でなければならない。

なお、曹洞宗国際布教寺院への交付については、寺院代表役員による依頼書（書式自由）をもってこれに代えることができる。

第8条（審査）国際布教支援金の交付ならびに第10条に定める報告書は、選考委員会を構成する選考委員がこれを審査する。

第9条（支援金の取消、停止、返還）虚偽の申告があったなどの場合、選考委員会がこれを審査の上、国際布教支援金の取消、停止、及び返還を求めることができる。

第10条（義務）国際布教支援金の交付を受けたものは、報告書を提出しなければならない。

なお、曹洞宗国際布教寺院への交付についてはSOTO禅インターナショナル作成による報告書をもってこれに代えることができる。

第11条（返還の義務）国際布教支援金の交付を受けたものは、第10条の義務を果たすことによって、返還はしなくても良いものとする。なお、選考委員会を構成する選考委員がこれを審査する。

第12条（会員への報告）国際布教支援金の交付があった場合、翌年度の総会において選考委員により報告を行う。

第13条（委任）この規程の施行に関し、必要な事項は選考委員会が別に定める。

附 則 この規程はSOTO禅インターナショナル規約第20条第3項に則り、2005年1月1日から施行する。

桑港寺70周年・好人庵10周年・南アメリカ開教100周年

文責・S Z I 会報編集長 浅井 宣 亮

本年度はサンフランシスコ桑港寺開創70周年・好人庵禅堂開創10周年にあたり、10月22～24日にかけて慶讃法要が現地で開催されます。また、ペルー共和国において南アメリカ国際布教（開教）100周年記念行事が8月下旬に開催されます。

〔桑港寺の歴史〕

1933年、ロサンゼルス禅宗寺の開創である磯部峯仙師は、北カリフォルニア布教の拠点の必要性を感じ、サンフランシスコに赴きました。同市ブッシュストリートにあった旧ユダヤ教大聖堂を購入することを決意し、日系人の有志縁者を説得し購入することとなり、1934年12月8日、サンフランシスコ・ジャパントウンに桑港寺が誕生します。

創立後、間もなく婦人会、青年会等が組織され、ロサンゼルス禅宗寺との情報交換等が始まります。またジャパントウン地域における日系社会の交流の場とし

ての機能も有し始めます。

太平洋戦争勃発に伴い、1942年4月8日の釈尊降誕会を最後として本堂を明け渡し、日系人は収容所に抑留されました。戦争中はアフリカ系アメリカ人のキリスト教会として使用されましたが、当時のメンバーは抑留中も募金活動続け、建物の所有権を確保し続けました。戦争後1948年に再び元の桑港寺に戻ります。

1950年、鳥羽瀬保道師が着任。当時の米国人メンバーの勧めにより、桑港寺内で米国人による小さな禅グループへの講義などが始まります。1959年から就任した鈴木俊隆師は、日系人教化と同様に米国人教化にも力を注ぎました。鈴木師は1967年にタサハラ禅センター禅心寺を創立され、1969年にはサンフランシスコ禅センターに転任されました。

1984年、ブッシュストリートより現在のラグナストリートに本堂を新築移転し、永平寺副貫首丹羽廉芳老師（当時）を拝して落慶法要が厳修されました。1986年には再び丹羽老師を拝請し、因脈会を修行しました。

1994年の創立60周年の際には「禅を聞く会」が開催されました。また、1999年には北アメリカ開教センター（現曹洞宗国際センター）がロサンゼルス禅宗寺より桑港寺に移転しました。

現在、桑港寺では館寺規弘国際布教師の下、坐禅会、ワークショップ、写経会などが定期的に行われています。また祥月法要、修正会、涅槃会、彼岸会、花祭り、盂蘭盆会、成道会等の法要の他に、ひな祭り、七五三祈祷、餅つきなどの日本の伝統行事も地域交流の一環として行われています。



旧桑港寺



現桑港寺



桑港寺 餅つき



桑港寺 花祭り



桑港寺 お盆



桑港寺 七五三



好人庵 禅堂

〔好人庵禅堂の歴史〕

1982年の初め、日本料理レストラン"好（よし）の店"のオーナー3名がサンフランシスコ近郊のオークランドにある自分達の屋根裏を改造し、4畳の禅堂と6畳の茶室を創設しました。これが好人庵禅堂の始まりです。"好人庵"とは"好き人々の集う庵"という意味で、静寂の中に黙座し、自己を知り、社会と調和して生きることを学ぶ場所になるように願って秋葉玄吾師によって命名されました。

日本からの支援もあり、1994年には伝統的日本様式の禅堂が建立されました。同時に秋葉玄吾北米開教総監（現、北アメリカ国際布教総監）が主任開教師に就任され、正式に日本の曹洞宗宗務庁より認可登録されました。

現在、毎日の坐禅の他、2月と12月には8日間の摂心、毎月1回3日摂心が行われています。また、毎週末には、お茶・生け花・習字・太極拳の稽古や、坐禅入門・絡子製作などのクラスが開催されています。

〔南アメリカ開教100周年記念行事〕

ペルー共和国首都リマ市において8月28日「100周年記念法要」が開催されます。その他「講演会」、「5日間摂心」、リマの慈恩寺における「お盆法要」が予定



好人庵 お茶の稽古

されています。また、旧慈恩寺跡地に残る慈恩寺二世齊藤仙峰師墓石の日本人墓地への移転、及びペルー国内に点在する日本人墓地への参拝等も企画されています。

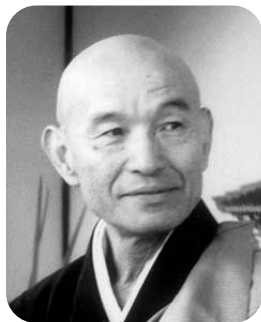
・・・これらの行事に興味を持たれた方は、SZI事務局または宗務庁国際課までお問い合わせ下さい。・・・

アメリカの仏教書

第6回／禅仏教篇⑥

前角博雄老師の本（2）

アメリカ マサチューセッツ州 ヴァレー禅堂 堂頭 藤田 一 照



前角博雄老師

わたしのいる禅堂から車で30分ほどの街に小さな本屋さんが一軒あります。アメリカのこのあたりの地域（アメリカ東部ニューイングランド地方、カリフォルニアと並んで仏教への関心が高い地域）ではいまやそういう本屋の店頭にも仏教の専門雑誌が数種並ぶようになっています。

わたしが定期に読んでいるのはTricycle(季刊)、Shambhala Sun(年6回発行)、Buddhadharma(季刊)といった雑誌です。そういった仏教雑誌に載っている記事は片田舎に住んでいるわたしのような者にとって、アメリカの仏教界の現況や動向を知る格好の情報源となっています。

先日手にしたShambhala Sunの2004年3月号では前角老師と4人のお弟子さんたちが曹洞宗のお袈裟をつけた法衣姿で立っている写真が表紙に使われていました。前角老師の弟子達で構成されているWhite Plum Sangha（「白梅僧伽」）についての記事がこの号のカバーストーリー（特集記事）になっており、「前角老師系」の禅が西洋仏教のなかでも最も活気があり、西洋文化という土壌への移植に成功をおさめた仏教グループの一つとして紹介されています。そこには前角老師の生い立ちや渡米してからの精力的な活動の素描、遷化後の弟子たちの動きなどを紹介する論文、「聞・思・修そして自分の人生のうちに涅槃を実現すること」と題して前角老師が1994年1月8日（遷化の前年）に禅センター・オブ・ロサンジェルスで行なった提唱の筆録、前角老師の高弟たちが自分にとっての禅とはなにかについて述べたものからの抜粋が掲載されています。こうした記事を読むと、前角老師がアメリカ仏教の歴史に残した足跡の大きさをあらためて思い起こします。

さて前回に引き続いて前角老師の本を紹介していくことにしましょう。

以前紹介した鈴木俊隆老師の講話集ZEN MIND BEGINNER'S MIND（『禅心 初心』）には「…もし悟りを得ようとして努力するなら、その努力は依然として業(カルマ)の一部である。そういう努力はしょせん、業

をさらに重ね、業に駆られての努力に過ぎないのだ。菩提達磨の言ったように、有所得の観念をもって行う修行はいかなるものであれ、業を反復しているだけだ」という功利主義的なアメリカ人にはおそらく衝撃的な主張が随所に見られ、全体として「無所得の常精進」という修行の態度が特に強調されています。そこではenlightenment（悟り）の内実について積極的に語ることは意図的に避けられているように思われます（「坐禅をしているときの状態そのものが悟りである」と語っているところが一箇所ありますが・・・）。「第一部 正しい修行」、「第二部 正しい態度」、「第三部 正しい理解」という構成からもわかるように修行の成果よりもプロセスに焦点をあてた説き方で、修証一如という立場から「修」を押さえれば「証」はそこにおのずから入っているとされているからです。そういうわけでこの本のなかには悟り、あるいはそれに類する言葉がほとんど見られないのです。一方、前角老師の本もそれと同じ立場に立ってはいませんが論調がだいぶ異なっています。

1970年代後半に前角老師と一番弟子の徹玄・グラスマン師が編集した5冊の禅の本がZEN WRITINGS SERIESという双書名のもとに禅センター・オブ・ロサンジェルの出版部から出されました（前回の記事参照）。その第四巻はTHE HAZY MOON OF ENLIGHTENMENT- ON ZEN PRACTICE（『悟りの朧月－禅修行について その3』）と題のなかにはっきりとenlightenmentという言葉が含まれています。さらに目次を見るとその第一部はENLIGHTENMENTという標題がついており、前角老師の提唱The Sound of Enlightenment（「悟りの音」）、原田祖岳老師の提唱Approaches to Enlightenment（「悟りへの諸々の接近」）、徹玄グラスマン師と弟子との問答What is Enlightenment?（悟りとは何か）という三つの文章が掲載されており、いずれも悟りとはどういうことかという問題を正面から取り上げた論じ方をしています。その老師の提唱から何箇所かを抜粋してみましょう。

「・・・仏教とは目覚めの教え、悟りへの道である。悟りとは我々と外的世界との合一と調和を実現することだ。それは自分を他のすべての物、他のすべての人から分離させ、あらゆる種類の問題と困難を生み出している悪い夢からはっきりと目覚める道である。・・・」

「・・・悟りをそれとして求めてはいけないといわれることがある。しかし、『求めてはいけない』というのは自分の外に何かを求めるなという意味なのだ。実際には『求めなくてはいけない』。真実の自己を求めなくてならないのだ。それこそがすべての仏祖たちがしてきたことだからだ。探し求めなければどこにも行き着かない。・・・」

「道元禅師が『たとい会に誇り悟に豊かにして警地の智通を得、云々』といわれたのは悟りそのものを否定しているのではない。それが最終的なものではないということと言わんとしたただけなのだ。当時、そういう境地を得ればもうそれ以上の修行を止めてしまうか、そこに到ればなにをやってもいいというような誤った風潮があったから、そうではないと注意をうながしているのだ。・・・」

この本の第二部はDELUSION（迷い）で、『従容録』第11則「雲門両病」の公案が取り上げられています。そこには前角老師によるこの則の英訳、安谷白雲老師の提唱、前角老師による頌の解説、徹玄グラスマン師の迷いをめぐる弟子との問答がおさめられています。第三部はENLIGHTENMENT IN ACTION（行為における悟り）で道元禅師の『八大人覺』について前角老師が詳細な解説を行い、それについての徹玄師と弟子の間での質疑応答が付されています。第一部で悟り、第二部で悟りを曇らせる迷いについて論じたので、ここでは日常生活の中において悟りをいかに具現化するかという問題に焦点が当てられています。分量的には本書の半分を占める量です。

前角老師は1933年の生まれですからこの本が出たときには40歳代だったはずです。この五冊の「禅著作シリーズ」のあと、老師はお弟子さんたちの出された禅の本やその他の人々の書いた仏教の本の推薦文や序文をたくさん書かれています、ご自身の著作は生前には出版されることはありませんでした。しかし、その間には欧米各地で数多くの提唱をされています。1995年の遷化後、弟子たちの手によって未発表の提唱録の編纂がすすめられ、最近矢継ぎばやに2冊の本が出版されました。

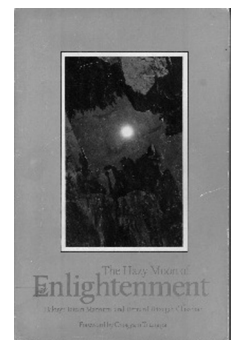
* Appreciate Your Life: Zen Teaching of Taizan Maezum Roshi(『自分のいのちに感謝しなさいー大山前角老師の教え』2001年5月刊)

* Teaching of the Great Mountain: Zen Talks by Taizan Maezum Roshi(『偉大な山の教えー大山前角の法話』2001年11月刊)

前者の本はまだ読んでいけませんので、残りの紙面で後者の本を簡単に紹介します。

本書は弟子の玄法・マーゼル師が創設した「観世音サンガ」の修行者たちに向けて行なわれた提唱の記録です。年代的には1987年から1992年、場所的には英国、オランダ、ポーランド、ユタ州のソルトレイクシティ（玄法師はユタ州の観世音禅センターを本拠としてヨーロッパ各地に支部をもっている）と各地にわたっています。二部からなる構成で、第一部は「The Echoless Valley(不響の谷)」と題され、『永平広録』にある道元禅師の『七賢女経』に基づいた上堂を「無根樹」、「無陰陽の地」、「不響の谷」の三章にわけてかなり詳しく拈提した内容になっています。

第二部には「無」、「観世音」、「現成公案」、「自受用三昧」、「瑞巖和尚」、「只管打坐」、「正法眼」、「戒」、「神」、「儀式」、「四法印」という11の比較的短い提唱録がおさめられています。紙面の都合で詳しい内容の紹介はできませんが、こうした本は前角老師が西洋人たちに曹洞禅の本質的なところをなんとかして正しく伝えようと真剣に苦闘された軌跡をたどるための興味深い記録であり、また日本の曹洞禅に関わる人たちにとっては自分達の伝統を新しい視点からとらえなおす貴重な足がかりになると思います。それが宗門の法財としてなんらかの形で日本で日の目を見る時が来ることを祈っています。



海外レポート

大遠忌の思い出

禅宗寺元理事長 井上 慎二

私にとって二度と来ない、五十年に一度の道元禅師の大遠忌の法要に参加させていただき、自分で体験しなければ分からない大切なものを感じさせていただきました事を大変感謝したいと思っています。

私にとって、永平寺にお参りするのとは今回で二度目でしたが、一泊するのは今回が初めて、吉祥閣での一夜は、不安と好奇心の高まる中で、予想をはるかに上回る期待に応えてくれた一夜でした。この度の参詣に関し、何か感想を述べたく筆を執りましたが、文句垂れの私の事です、故色々なことが気掛かりになったのですが、文句があれば自分でやればよいと、お釈迦様が言われているのではないかと反省している私です。半年以上に亘り、毎日の様に行われてきた大法要、大変な準備と予修が行われたことと思いますが、老いも若きもそれぞれの立場でこの行事と取り組んでおられるお姿を拝見し、関係者ご一同様に大変ご苦勞様でしたと申し上げたいと思います。

750年の伝統を守り伝える永平寺でのハイライトは夜明けから降り始めた小雨の中で聞いた大太鼓と聴き紛う大木魚の音に導かれ、ゆっくりと唱える読経の声、大勢の祈りが一つとなり、慕古の心が伝わってくる様な、言葉では言い表せない感動を覚えたことでしょう。お経をゆっくりと唱えるのはサンデースクール（日曜学校）の子どもたちだけかと思っていましたが、なる

ほど、あのような読経もあるんだなと感銘を致しました。都会の騒音の中で生活する私たちでは普段とても感じる事の出来ない、750年の伝統を守る永平寺故体験できる宝物ではないかと思った次第です。

又、宮崎禅師様には、大変お疲れのところ、私ども国際グループの為にお話しをして頂きましたこと大変ありがたく思っています。禅師様の通訳をされた黒柳先生も又大変だったでしょう。ご苦勞様でしたと申し上げます。話せば切りのない程、数々の体験をさせて頂きました。色々な人との出会い、ロサンゼルスで色々とお世話になりましたご老師様を始め、曹洞宗門の将来を担う若い宗侶の方々にお会いできましたこと大変懐かしく思いましたが、ゆっくりとご挨拶の出来なかった事が残念でした。それでは又再会の日を楽しみにしています。

禅宗寺80周年にて



SOTO 禅 international

SZIワークショップ「アメリカの禅(仮題)」のお知らせ

SOTO禅インターナショナルでは、アメリカで活躍されている国際布教師をお招きし、その活動を広く知っていただくためにワークショップを企画しました。

特に、修行僧を対象に両大本山を会場としてお借りし開催することは意義深いことだと考えています。未来の曹洞宗を担う僧侶に国際布教を目指すきっかけを作り出すことができれば嬉しい限りです。

もちろん、会員の皆様や、興味ある方もどなたでも参加を歓迎いたします。会場の準備を整えてお待ちしておりますので、どうぞご参集ください。



日 時 6月19日(土) 午後4時～
会 場 群馬県高崎市内(群馬県布教師会主催)
問合せ先 0274-84-2518 峯岸

日 時 6月20日(日) 午後2時～
会 場 埼玉県行田市・長光寺(長光寺主催)
問合せ先 048-557-0999 福島

日 時 6月21日(月) 午後2時～
会 場 大本山總持寺三松閣大講堂(SZI主催)
問合せ先 SOTO禅インターナショナル事務局

日 時 6月22日(火) 午後6時50分～
会 場 大本山永平寺(本講のため、修行僧のみです)

秋山洞禅師 (曹洞宗国際布教師・アンカレッジ・ゼン・コミュニティ主管)

1936年6月 群馬県高崎市に生まれる。東京大学経済学部卒。学生時代は合気道(合気道部主将)、ヨガ、スキーに熱中。(社)東京銀行協会勤務を経て、1965年7月から67年8月まで、合気道、ヨガを教えたり指圧をしながら米国・ヨーロッパ各地を旅行。
その後 東京、ハワイ大学、ウィスコンシン大学ミルウォーキー校等で日本語を教える。
1978年6月 曹洞宗出家得度。
1979年5月 禅宗寺駐在開教師(国際布教師)としてロサンゼルスに赴任。
1985年9月～ ミルウォーキー・ゼン・センター主管。
2001年6月～ アンカレッジ・ゼン・コミュニティ主管。アラスカ大学アンカレッジ校で坐禅指導。
現在に至る。